〔研究ノート〕

オスマン朝末期の楽譜

松本奈穂子*

I. 序
II. 楽譜出版
III. 結論

I. 序

オスマン朝は19世紀初頭よりヨーロッパ文化を本格的に吸収し始めた。音楽文化においても同様であり，1826年に旧来の軍楽隊が廃止され，西洋式の軍楽隊と音楽教育システムが導入されたことは，その後のオスマン帝国における音楽文化の動向に無数の影響を与えた。大きな影響の一つは西洋音楽教育システムの一環に含まれる五線譜の普及である。それまで口伝を旨として継承され続けてきたトルコ古典音楽も，五線譜で出版されるようになり，音楽産業の一環である楽譜出版が19世紀後半から盛んになる。オスマン帝国における音楽産業は，非西洋諸国における事例の一つとして検討すべき重要な課題である。

オスマン朝末期から共和国初期にかけての音楽研究は1990年前後から本格的に始まり（Behar1987, 1993, 2003［1998］，FELDMAN 1992, 1996, KOSAL 1999, ORANSAY 1985, ÖZALP 2000a, b, Paçacı 1999），近年とりわけ2010年前後から活発になりはじめてきている（ALTINAY 2004, ARACI 2006, 2010, BAYDAR 2010, Behar2008［2005］，EĞECİOĞLU 2012, Paçacı（ed.）2009, Paçacı 2010, ÜNLÜ 2004, O’ CONNELL 2013）。2011年イスタンブル大学に付属する形でバルタリマヌのミルギュン・キョシュキュに設立されたオスマン音楽研究所はこうした近年盛んになりつつあるオスマン音楽研究の潮流を示すものでもあり，そこではトルコ古典音楽の声楽家でもありオスマン朝の音楽研究を続けている Gönül Paçacı ギョヌュル・パチャジュも教鞭を執っている。パチャジュは旋律学校に関する執筆・研究活動を数年来複数手がけており，継続する旋律学校研究への基盤を築いている（Paçacı 1994a,b, 2007, 2010: 202-215, 247-262, 390-392, 2011）。

本稿では楽譜出版に焦点を当て，後続のオスマン帝国における音楽産業研究の端緒としたい。

受理日2014年11月26日
＊教養学部芸術学科音楽学課程准教授

II. 楽譜出版

オスマン朝をはじめ，イスラーム音楽文化においては本来口頭伝承が主要な継承・教育手段であった。紙面に音楽をとどめる試みはアリ・ウフキーやカンテミルオウル，ハンパルスムらのような非ムスリムによって帝国内でも行われていたし（Kantemiroğlu2001, UFKÎ1975），メヴレヴィー教団の作曲家など数名のムスリムも記譜を行ってはいた。しかしながら，それらが実際の稽古の場で主体的に使われることは殆どなかった。またこれらの楽譜の多くは西洋音楽以外の多くの音楽文化に多い文字譜であった。帝室音楽隊設置後公式に西洋音楽教育が行われはじめてから初めて五線譜の教育がオスマン朝で飛躍的に進んだのである。多くの非西洋諸国同様，口頭伝承が主体であったオスマン帝国の音楽文化で五線譜が積極的に用いられるようになったのは，1826年第30代スルタン，マフムート Mahmut 2 世（在位1808-1839）によって西洋式の音楽教育制度が導入されたときである。それ以前にも，西洋における巨大な隣国として常に相互に影響を与えあう関係にあったオスマン帝国には，西洋音楽の様々な影響が入り込んできていた。しかし1826年は，イェニチェリの廃止に伴い従来の軍楽隊を西洋式の編成にするとともに，西洋音楽教育が宮廷内でも行われることになった。それまで内廷 Enderun にて行われていた伝統音楽の教育が，新編成された宮廷音楽隊 Muzika-i Hümayun にて西洋音楽の教育に変わっていったのである。オスマン朝の宮廷は，メヴレヴィー教団と並んで帝国内における最も重要な音楽家の養成所としても機能していた。その宮廷で西洋式の音楽教育が導入されたことの意義は極めて大きい。

この時期から，オスマン帝国では五線譜が普及していくことになる。Behar1987[1] では，トルコ古典音楽において楽譜が積極的に用いられなかった背景について，トルコ古典音楽の伝承が「記憶の絶対性」に基づいた原理によって行われていたため，その秩序を揺るがす楽譜の出現について 1 章を割いて述べている（Behar1987: 19-63）。オスマン朝では記譜の試みが全く無かったわけではないが[2]，楽譜がトルコ古典音楽の伝承に積極的に用いられることは，宮廷で西洋音楽の導入が正式に行われ始める1826年まで無かったのである。

また，ユルドゥズ宮殿図書館に保存されていた手稿譜のように，この時期は手書きの楽譜も数多く存在しており，現存する多くの手稿譜は宮廷に献呈されたものである。ユルドゥズ宮殿から出た楽譜類のコレクションは上述のようにイスタンブル図書館に最も多く保存されている。他にも同時期の楽譜はアタテュルク図書館やトプカプ宮殿博物館，ヴェダト・コサル Vedat Kosal コレクション（Kosal 1999），フェルフンデ・エルキン Ferhunde Erkin コレクション，メルト・サンダルジュ Mert Sandalcı コレクションなど個人のコレクションに含まれている。

オスマン朝において最初に五線譜の楽譜が出版され始めるのは1870年代である。1855年に帝室音楽隊に入り，トルコ音楽と西洋音楽とを学んだハジュ・エミン・エフェンディ Hacı Emin Efendi（1845-1907）が1873年にオスマニイェ印刷所と共同で石版印刷所を開いたのが始まりとされている。1887年に出版された五線譜を学ぶ者のための自著『楽譜の先生 Nota Muallimi』の別名でも知られた彼はこの印刷所でアリフ・ベイ Arif Bey，シェヴキ・ベイ Şevki Bey

（1860-90），リファト・ベイ Rif' at Bey（1820-1888）ら往時の大作曲家たちの歌曲を中心として400ほどの楽譜を印刷したが，これらは”Chant Turc”（トルコの歌）という楽譜タイトルがラテン文字で表示されており，トルコ人作曲のトルコ古典音楽作品に，彼の師であるグアテッリ・パシャやザティ・ベイらがピアノにより和声をつけたものであった（Behar1987: 95, ÖZTUNA 2006a: 261, Paçacı2010: 218-220）。エミン以外の作曲家で五線譜上に自作を記す者も現れた。宮廷でムアッズィン長を務めた上述のリファト・ベイなどはその一人で，エミン同様帝室音楽隊で楽譜を学んでいる。この時代に宮廷で学び・仕えた者たちの中から，五線譜での作曲を積極的に行い始めた者が現れ始めたと考えられる。

1893年から発刊され始めたターヒル・ベイ Tahir Bey の雑誌『マールマート』の付録として付けられた『chant turcs（トルコの歌）』というタイトルの楽譜も，エミンが印刷したものである。『大行進曲』や『スルタン万歳』などのようにスルタンに献呈された曲なども含まれているこの付録楽譜集の47号裏表紙には，後に旋律学校の教員にもなるアリ・リファト・ベイによる「楽譜に関する注釈」が掲載されており，エミンの『楽譜の先生』とともに，トルコ古典音楽の五線譜記譜に関するその後の様々な試み－旋律学校の『トルコ古典音楽集』内の音律に関する特記事項もその流れに含まれる－の一つとして注目される内容となっている（Ayangil 2008: 416-418, Paçacı2010: 218-220）[5]。

表１は，この『マールマート』誌付録の楽譜の一部をパチャジュ2010が列挙したもののうち，曲名，曲種名，作曲者名，和声付けをした編曲者および作詞者などの情報をまとめたものである。ほとんどの曲がトルコ古典音楽の歌曲 şarkı であること，歌曲の場合は1冊に2曲含まれているものが多いことがここからうかがえる。このうち5曲は行進曲の記載があり，3番と49番はアブドュルハミト2世に，12番はアッバス・パシャに，献呈されている。13番はマズルカというポーランドの民俗舞踊の形式で作られており，西洋音楽の曲種も含まれていることがわかる。マズルカは同時期オスマン帝国で人気のあったワルツなどとともに，好んで作曲されたジャンルの一つである。

ピアノ伴奏のない楽譜が急速に普及するのは20世紀初頭とりわけ第二次立憲政期以後で，シャームル・セリム Şamlı Selim，イスケンデル İskender とテヴフィク Tevfik，イスマイル・ハック・ベイ İsmail Hakkı Bey（1866-1927），ウーディー・アフメット Udi Ahmet，オンニク・ザドルヤン Onnik Zadoryan，ファフリー・コプズ Fahri Kopuz（1882-1968）のような楽譜普及者の活躍はすべてこの時代に入る（Behar 1987: 43）。元来和声概念の存在しないトルコ古典音楽にピアノで伴奏をつけ楽譜にするという行為は，当時オスマン朝でもてはやされていたピアノで演奏できる楽曲提供の需要とともに，西洋音楽の吸収と自国文化への応用の様々な試みの発露でもあった[6]。過度の西洋音楽偏重主義がひとしきり過ぎると，西洋音楽要素を何でもどこでも摂取するのではなく，必要なものを適宜自国の伝統音楽にも応用していくという姿勢が芽生え始める。

こうした流れの中で，旋律学校の楽譜が誕生してくるのだが，旋律学校の開校以前にも音楽教育のための試みはいくつかあった。これらのうち最も重要な機関は当時のイスタンブル市長ジェミル・ベイ cemil bey（topuzlu）の主導で開かれた「オスマン演劇学校（ダーリュルベダ

表１　『マールマート誌』付録楽譜の例

表1『マールマート誌』付録楽譜の例

	曲名	曲種	作曲者（和声編曲者または作詞者）
1	Padişahım Çok Yaşa(Vive le Sultan)	Marş	Madmazel Loret Rozet(Mlle Laurette Rosette)
2	Dil-i Zâre Helecân Vermektedir Efgânım	Musıki-i Humayun Mülazımlarından	Faik Edhem
3	Marş-ı Zafer	Marş	Artur Astiravolo
4	Tâb-ı Dîdârınla Şahım Müstenir Oldı Cihân		Müezzinân-ı Hazret-i Şehrşyârîden Hakkı Bey
5	Aman Ey Yâr Cefâ-pîşenizâr Etme Beni	Beyâtî Şarkı(Ağır Aksak)	Rıza Bey(armonize Melik Efendi)
6	Ey Dil Ne Oldun Feryâd Edersin	Uşşak Şarkı(Curcuna)	Civan Ağa(armonize Melik Effendi)
7	Çıkmıyor Asla Hayâli Benden Âh O Gözlerin	Hicazkâr Kar-nâyî	Hazret-i Şehrşyârîden Bekir Bey
8	Tîr-i Gamzen İşledi Tâ Cânıma/ Arz Edüb Kış Gam-nümâ Dîdârını	Nihâvend ve Hüzzam Şarkısı	Hakkı Bey
9	Âferin Ey Pâdişâhın Sevgili Askerleri		Zâtî
10	Bugün dünyâyı Tenvîr Eyleyen Mihr-i Hilafettir	Nihâvend Şarkısı(Nimdüyek)	Hakkı Bey
11	Gençliğim Hayâtım Kurbânım Olsun	Nihâvend Şarkısı	Müezzinân-ı Hazret-i Şehrşyârîden Hakkı Bey
12	Hıdiv-i Mısır fehâmetlü devletlü Abbas Hilmi Paşa Hazretleri nâm-ı âlîsine tanzim kılınan marşdır	marş	Toni Gırög
13	Şevketinle Pâdişâhım Zevk u Şevk ile Çok Yaşa	Ağır Mazurka	Osman Zeki Bey
14	Benlerindir Hep Senin Uşşâkını Suzân Eden/ Aman Lûtfelye Mehpâre	Mahûr / Hicaz Şarkısı	Hakkı Bey/ Edhem Efendi
15	Gidelim Göksu'ya Bir Âlem-i Âb Eyleyelim	Hicazkâr Şarkı	Hristo Efendi(armonize Melik Effendi)
16	Sa'd Ola Iyd-i Şerifin Pâdişâhım Çok Yaşa		Müezzinân-ı Hazret-i Şehrşyârîden Hakkı Kulları
17	Devâ Yok Mu Neden Bîmâr-ı Aşka	Muhayyer Şarkı(Evfer)	Merhum Hacı Arif Bey
18	Âsâkir-i Şâhâneye mahsus marşdır	marş	Musıkî-i Hümâyûn kolağalarından Osman Zeki Bey'in yâdigârlarıdır
19	Fâtih ü Kişverküşâ Rezm Âverân Derler Bize	Hicazkâr Şarkı	Dede Ahmed Efendi(Güfte Beylikçi Muavini Münir İsmet Bey)
20	Söyle Bana Ey Cilve-ger/ Gel Aman Âhû Baksılım Bitti Sabr ü Tâkâtım	Rast Şetaraban Şarkısı	Faik Bey/ Hakkı Bey
21	Hüsn-i Güftârın Senin Ey Mehlika	Hicaz Şarkısı(Düyek)	Ali Rıfat Bey
22	Gıramuke Alemeni ef-Nuha Yâ Habibi El-Kalb Suf	Chant Arabe	
23	Kuş Dilinde Bir Perî-Rû Eyledi Meftun Beni/ Bahs Açub Aşıklığımdan Gizlice Cânânıma	Nihâvend Şarkısı	İbrâhim Efendi
24	Geldiğim Demde Bu Mihnet-Hâneye Ben Ağladım/ Yürü Ey Gonca-dehen Azm-i Gülistan Edelim	Suzinak/ Uşşak Şarkısı	Hafız Salis Efendi/ Hamparsum Efendi
25	Bitmiş Şu Âh u Vâhım Baht-ı Nâhemvâredir	Hicaz Şarkısı(Düyek)	Aleksan Efendi(Güftesi Yanyalı Müfit Bey)
26	Târife Gelir Mi O Mehin Zülf-i Siyâhı/ Hayli Dem Oldu Perestiş Ettiğim Pinhandır	Nihâvend Şarkıları	Hacı Arif Bey/ Devlet Efendi
27	Ben Nasıl İtmem Temenni Neşve-i İkbâlini	chant turk(Aksak)	Selaheddin Bey
28	Ey Mehlika Ey Gülbeden/ Aldın Dil-i Nâşâdımı	Hüseyni / Karcığar Şarkıları	Dede Ahmed Efendi/ Ali Bey
29	Deşt ü Hâmun Kazâya Daldım/ Söyle Allah Aşkına Ey Goncaleb	Hicaz(teksofyan)/ Suzinak (Aksak) şarkısı	
30	Eyledi İhyâ Visâlin Dil-Harâb Âbâdımı/ Sen Şeh-i Hüsn-i Behâsın	Der Fasl-ı Mahur Şarkı/Hicazkar Şarkı	Sultan Selim Cennetmekânın/ Tanbûrî Mehmed Bey
31	Bir Gonca Dehen Üzdü Beni Hayli Zamandır/ Çoktan Beridir Çârene Mahrûm-ı Visâlim	Rast/ Hicaz şarkıları	Devletlü Mahmud Celaleddin Paşa Hazletleri/Hkkı Bey
32	Yeter Feryâdın Ey Bülbül Beni Mecnun Misal Etme	Hüzzam Şarkısı	Devlet Efendi
33	Cânım Dediğim Kast Ediyor Cânıma Vallah	Suzinak Şarkısı	Hafız Cemil Efendi
34	Aldanmam Artık Vâd-ı Visale/Zâr Oldu Gönül Nazre-i Sûziş Eserinden	Suzinak/ Mahur Şarkları	Kanunî Garbis Efendi/ Kadıköylü Neş'et Bey
35	Şâd İt Kerem Kıl Meclisim/ Yok Mu Bu Âlemde Bilmem Derd-i Aşkın Çâresi	Mahur/ Hüzzam Şarkıları	Haşim Bey/ Tevfik Efendi
36	Dinle Sözüm Ey Bî-bedel/ Gör n'etti Cânâ Firkatin	Mahur Şarkıları	Numan Ağa/ Kanunî Edhem Efendi
37	Niye Mahzun Duruyorsun Öyle/ Dün Gece Rûyamda Gördüm Bir Peri	Hicazkar/ Karcığar	Hakkı Bey
38	Bir Gün Beni Dildâr Acabâ Şâd Edecek Mi	Hüzzam Şarkısı	Hacı Arif Bey
39	Seyre Çıkmışsın Bugün Kâğıthâneyş/ Tezyîn Ediyor Gülşeni Sebboy ile Sünbül	Karcığar(Evfer)/ Bestenıgâr(Devr-i Hindi)	Hakkı Bey/ Hafız Efendi
40	Geçti Zahm-ı Tîr-i Hicrin Tâ Dil-i Nâşâdıma	Hicazkâr Şarkı(Ağır Evfer)	Merhum Hacı Arif Bey
41	Cennetmekân-ı Firdevs-i Aşiyan Gâzî Sultan Selim Han Hazletlerin	Fasıl Mahur(Devr-i Revan)	Sultan Selim
42	Sultan Hamid Binler Yaşa		Enderûni Yusuf
43	Kurban Olayım Gözlerinde Rûh-ı Revânım	Uşşak Şarkısı	Garbis Efendi
44	Nev-Fidânımdan Ayırdı Beni Baht-ı Yâr	Mâhur Şarkısı(Sofyan)	Kanunî Edhem Efendi
45	Âsitâne-i Devletinde Şimdi Hâtemdir Gedâ	Mahur Şarkısı	Şevki Bey
46	Ah Düşeyim Der İken Eyvah Vefâlısına	Hicaz Şarkısı(Ağır Aksak)	Rızâ Efenedi
47	Bir Gül-i Rânâya Gönül Bağladım	Hüzzam Şarkısı(Düyek)	Hacı Emin Bey
48	Mecbûr Oldum Ben Bir Güle	Bestenigâr Şarkısı	Haşim Bey
49	Âlî Marşı/ Zât-ı Hazret-i Şehriyârînın Evsâf-ı alü'l-âlini Tebcîl	Marş	Dikran Çuhacıyan

ーイ）Dârülbedâyi-i」である[7)]。同機関はパリから招聘された有名な演劇人アンドレ・アントワーヌ André Antoine の総監督下1914年に開設準備を始めた。演劇と音楽の学校として想定されていた同組織の演劇部門の部長にレシャド・ルドヴァン Reşad Rıdvan，音楽部門の部長に前述の作曲家アリ・リファト・ベイ（チャアタイ）Ali Rifat Bey（Çağatay）が就いた。音楽部門はさらに東洋と西洋の音楽科に分けられていた。同学校の設立には演劇，舞台音楽，トルコ音楽，西洋音楽を分離させず総合的に研究するという思想が主張されていたが，第一次世界大戦の勃発によりアントワーヌは帰国，西洋音楽部門も閉鎖された。演劇とトルコ音楽部門の活動継続は試みられたが，経済的困窮から1916年３月14日にトルコ音楽部門も閉鎖された。いかに短期間しか活動しえなかったとしても，オスマン演劇学校のトルコ音楽部門は設立目的や計画において，トルコ音楽史における重要な機関の一つであると言える。

オスマン演劇学校の音楽部門が果たした役割を引き継ぐような形で教育省の管轄下1917年に設立されたのが旋律学校である[8)]。戦時下設立１年で満足な活動ができない状態に陥ったが，1923年９月14日金曜日諸規定が刷新されて再スタートを切る。学長には作曲家ムーサー・スュレイヤー・ベイ Mûsâ Süreyyâ Bey が任命された。旋律学校はこの時期にもっとも実り多い活動を行った。教育とともに，とりわけトルコ音楽に関する様々な出版や調査もこの時期に始まった。民俗音楽調査やトルコ古典音楽の確定 tesbit は，共和国におけるこうした研究活動の最初期を形成しており，後続の活動に与えた影響も重要である。楽曲の精査とともに出版活動も行った。「旋律学校雑誌 Dârülelhan Mecmuası（計７号）」を1924年から1926年まで続け，『トルコ古典音楽楽譜集』出版も行った。この楽譜は最初の120号をオスマン語，残りの60号をラテン文字で出版されたのは前述の通りである。西洋音楽部門やトルコ音楽部門の様々な学生・教員による演奏会も活発に行われた。このうち西洋音楽部門ではコンサート活動－多くはユニオン・フランセーズ Union Française で行った－や旋律学校雑誌において出版した論稿の他，研究志向の活動は見られない。

文部大臣 Maarif Vekilliği がムスタファ・ネジャティ Mustafa Necati の時，教育教養部局芸術委員会 Tâlim ve Terbiye Dairesi Sanâyi-i Nefise Encümeni による1926年12月９日の決定により，運営体制 yönetimliği と教育計画 öğretim programı が変更され，トルコ古典音楽界には激震が走った。この新たなプログラムではアラトゥルカ Alaturka 部門は完全廃止され，トルコ古典音楽教員は解雇されてしまう。トルコ古典音楽活動は，新たに組織された「トルコ音楽演奏団 Türk Mûsikisi İcra Heyeti」と「歴史的トルコ音楽作品分類確立委員会 Tarihi Türk Mûsikisi Eserlerini Tasnif ve Tesbit Heyeti」という名の二つの活動に限定された。分類確立委員会は活動当初ラウフ・イェクター・ベイ Rauf Yektâ Bey を代表に，ゼカーイザーデ・ハーフズ・アフメット Zekâizâde Hâfız Ahmet，ムアッリム・イスマイル・ハック・ベイ Mallim İsmail Hakkı Bey らから構成された。芸術委員会のこの決定に関しイスタンブル市当局へ送られた規定の第３条には「委員会の第一の任務は（トルコ古典音楽の：筆者）保存と確立である。この活動うち優先権は宗教作品に与えられる。」として委員会の活動分野が定義されている。確立（tesbit）・収集（derleme）において宗教作品を優先させるのは，閉鎖されたテッケで発展した宗教音楽の傑作の喪失を防ぐためであったと考えられるがトルコ古典音楽の研究が「決

して授業や教育にはしないことを条件に授業の無い日に音楽院で活動できる」という委員会の活動分野の制限は，トルコ古典音楽の生命力を危うくするものであったとオズトゥナは理解している。事実，研究は行えても教育ができないのでは伝承が途絶えてしまう。トルコ古典音楽界にとっては不毛の時代であったが，それでも楽譜の整備・発行などの研究活動が続けられたことは後代にトルコ古典音楽ジャンルをつなげるためのパイプ役としてたいへん重要であった。研究活動の優先順位が宗教曲に与えられたことで，ラテン文字表記の楽譜集には『メヴレヴィー典礼曲集』，『イラーヒ集』など，『トルコ古典音楽楽譜集』には含まれなかった宗教曲の楽譜集も含まれていくことになる。旋律学校は1927年１月22日にイスタンブル音楽院 İstanbul Mûsikisi Konservatuarı の名でイスタンブル市営となった。その後イスタンブル市立音楽院 İstanbul Belediye Konservatuvarı の名で活動を続ける。

旋律学校の名で出た楽譜集は，前述のとおり①『トルコ古典音楽楽譜集』の１号から120号，②1926年に出版された『祖国の旋律集』，同じく1926年から出版され始めた③『アナトリア民謡集』第１冊から第７冊の３点である。①はイスタンブル音楽院改組後「イスタンブル音楽院出版 İstanbul Konservatuarı Neşriyatı」による『トルコ音楽の古典集』の見出しで，1928年文字改革後のラテン文字表記で121号から180号までが後続出版され，さらに1995年セマー・ヴァクフが後続未発刊分の181号から263号を出版している。②は単行本で民謡集，③は第８冊から第13冊までがやはりイスタンブル音楽院改組後ラテン文字表記で後続出版されている。トルコ民俗音楽の楽譜２種が1926年から出版され始めたのは，この年にトルコ古典音楽の教育が禁止されたことと関連しており，それまでも民俗音楽に関わる調査・研究は行われてはいたがトルコ古典音楽教育の禁止によって活動の比重が移ったのである（Paçacı2010）。

『トルコ古典音楽楽譜集』には上述の他の旋律学校出版楽譜と異なり出版年が無い。そのため各号の明確な出版の特定は難しいが，イェクターが没する1935年までには180号まで出版されていたはずであるとパチャジュは推察する。選曲と記譜は，上記のイェクター，ゼカイザーデ，イスマイル・ハックらによって厳正に行われた。選曲はもちろん，それぞれの曲の最も正当な伝承に基づく形を記すことが重要で，「オスマン朝最後の大作曲家」ゼキャーイ・デデの息子が委員会にいることはこの観点からたいへん有益であったという。口伝では誰に稽古をつけてもらったかがたいへん重要であり，その伝承経路はトルコ古典音楽の世界では比較的はっきりしていた。当然ながら父ゼキャーイ・デデの薫陶を受けたゼカイザーデの記憶は大いに参照されたのであろう。

III. 結論

オスマン帝国末期の楽譜出版は，伝統的なトルコ古典音楽の要素と，19世紀初頭から本格的に受容し始めた西洋音楽の要素とが混合した興味深い文化触変の事例を示している。19世紀は主にトルコ古典音楽作品にピアノ伴奏を付けるという，和洋折衷ならぬ土洋折衷型の楽譜がたいへん好まれ数多く出版された事実からは，新しいものを伝統と隔離させず結びつけて摂取しようとする動きがみてとれる。こうした西洋音楽教育および五線譜導入初期の試みから，旋律

学校楽譜のように，伝統を損なわぬ形で五線譜化する動きへの変化の課程で，オスマン朝末期からトルコ共和国初期においては，様々な楽譜が誕生した。これらの更なる精査が今後の課題である。

本論は2014年度科学研究費『19世紀末から20世紀初頭におけるイスタンブルの音響文化』（代表者　松本奈穂子）の成果の一部である。

注

1）新井によって 1994 年に日本語訳が出版されている。本論における同書からの引用に関わる訳語は旋律学校以外基本的にこの新井の訳語に準ずる。

2）ポーランド出身のアリ・ウフキー Ali Ufki（1610-1675 頃）は一七世紀半ば，五線譜上に右から左へと通常とは逆の方向に記譜を行なった（UFKÎ 1975）。ルーマニア出身のカンテミルオール Kantemiroğlu（1673-1727）は十八世紀前半に自ら考案した文字譜で約三五〇曲の当時の器楽曲を採譜した（Kantemiroğlu, 2001）。アルメニア正教徒のハンパルスム・リモンジュヤン Hamparsum Limoncuyan（1768-1839）は十八世紀後半にアルメニア文字譜を用いて採譜した。記譜の習慣が稀薄であったオスマン帝国で彼らが記譜を行ったのは，楽譜の存在が当然の文化圏に彼らが属していたことも一つの要因であろうが，同時にムスリムの作曲家たちの中にも記譜を試みる者は存在した。十六世紀の軍楽や十七世紀のメヴレヴィー教団典礼歌の一部など，帝国を訪れたヨーロッパ人による楽曲の断片記録も散見される（Aksoy 1994）。

3）Ayangil 2008: 416-418 や Paçacı2010: 116-120 にその概要や一部ラテン文字転写などがある。旋律学校以前にも東方音楽協会の教師，オスマン演劇学校の音楽部門長などを歴任しており，オスマン朝からトルコ共和国にかけての音楽教育や洋楽受容の流れにおいて重要な人物の一人である。

4）パチャジュはこのマールマート誌付録楽譜リストを，1978 年の第一回トルコ学会議で音楽研究者エテム・ルーヒ・ユンギョルが発表したトルコ音楽楽譜出版に関する報告をもとに 49 冊分作成している（Paçacı2010: 379-382）。

5）こうした西洋文化と自国文化との出会いによって生じた様々な現象は，現在でも高く評価されるものも，奇異なものも含め，多くの非西洋諸国で見られた。日本における邦楽と西洋音楽との出会いによる文化触変については渡辺 2002 などに詳しい。

6）演劇分野を主体としたオスマン演劇学校の詳細は永田 2007 を参照。

7）旋律学校の設立過程や規定集 talimatname，定期刊行雑誌や他の楽譜集などからうかがえる活動内容などの詳細は別稿にて論じる。

引用文献

AKSOY, Bülent. 1994. *Avrupalı Gezginlerin Gözüyle Osmanlılarda Musıki*. İstanbul: Pan Yayıncılık.

ALTINAY, F. Rehan 2004 *Cumhuriyet Döneminde Türk Halk Müziği*. İzmir: Ege Üniversitesi Devlet Türk Müziği Konservatuvarı.

ARACI, Emre 2006. *Donizetti Paşa*. İstanbul: Yapı Kredi Kültür Sanat Yayıncılık.

――――2010. *Naum Tiyatrosu: 19. Yüzyıl İstanbul'nun İtalyan Operası*. İstanbul: Yapı Kredi Kültür Sanat Yayıncılık.

AYANGIL, Ruhi 2008 "Western Notation in Turkish Music". *JRAS* 3,18,4,. Pp.401-447(Royal Asiatic Society)

BAYDAR, Evren Kutlay 2010 *Osmanlı'nın Avrupalı Müzisyenleri*. İstanbul: Kapı Yayınları.

BEHAR, Cem 1987 *Klasik Türk Musıkisi Üzerine Denemeler*, Ankara: Bağlam Yayıncılık.（新井　政美

（訳）1994 年『トルコ音楽にみる伝統と近代』神奈川：東海大学出版会）
FELDMAN, Walter 1992. “Cultural Aothority and Authenticity in the Turkish Repertoire” . *Asian Music*, 22(3): 73-113.
FELDMAN, Walter 1996. *Music of the Ottoman Court: Makam, Composition and the Early Ottoman Instrumental Repertoire*. Berlin: Verlag für Wissenshaft und Bildung, Intercultural Music Studies, No.10.
Kantemiroğlu, 2001, *Musikiyi Harflerle Tesbit ve İcra İlminin Kitabı I,II*, İstanbul: Yapı Kredi Yayınları.
KOSAL, Vedat 1999. *Western Classical Music in the Ottoman Empire*. İstanbul: EKO Basım Yayıncılık ve Organizasyon Ltd. Şti.
永田雄三　2006.「オスマン帝国末期イスタンブルの演劇空間」.『駿台史学』Vol.129, pp.105-128..
ORANSAY, Gültekin(ed.) 1985. *Atatürk ile Küğ*. İzmir: Küğ Yayınları.
ORANSAY, Gültekin “Müzik: Cumhuriyetin İlk Elli Yılında Geleneksel Sanat Musikimiz” . *Cumhuriyet Dönemi Türkiye Ansiklopedisi*,10: 1496-1509.
ÖZALP, Dr. M. Nazmi 2000a *Türk Musikisi Tarihi I*. İstanbul: Milli Eğitim Basımevi.
———— 2000b *Türk Musikisi Tarihi II*. İstanbul: Milli Eğitim Basımevi.
ÖZTUNA, Yılmaz 2006a *Türk Mûsikîsi: Akademik Türk San’at Mûsikîsi’nin Ansiklopedik Sözlüğü I*, Ankara: Orient Yayınları.
---------- 2006b *Türk Mûsikîsi: Akademik Türk San’at Mûsikîsi’nin Ansiklopedik Sözlüğü II*, Ankara: Orient Yayınları.
PAÇACI, Gönül 2010. *Osmanlı Müziğini Okumak*, T.C. Kültür ve Turizm Bakanlığı.
ÜNLÜ, Cemal 2004. *Git zaman gel zaman: fonograf – gramofon – taş plak*. İstanbul: Pan Yayıncılık.
渡辺　裕　2002.『日本文化　モダン・ラプソディ』東京：春秋社 .